保健福祉学部学生による
児童館でのボランティア活動実践報告

渡辺　陽子 [*1]　高木　雅之 [*2]　田口　亜紀 [*3]　吉田　倫子 [*4]
青井　聡美 [*1]　織田　靖史 [*2]　飯田　忠行 [*5]

*1　県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科看護学コース
*2　県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科作業療法学コース
*3　県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科コミュニケーション障害学コース
*4　県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科人間福祉学コース
*5　県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科理学療法学コース

2023 年 11 月 15 日受付
2023 年 12 月 26 日受理

抄　録

県立広島大学保健福祉学部の学生が，三原市児童館「ラフラフ」でのボランティア活動を実施したため取り組みと成果を報告する。令和 4 年 6 月末から活動への参加を希望する学生を募り，令和 5 年 3 月末までに 73 名が参加登録した。動機は「子どもへの支援に興味があった」が最も多く，次に「分野にかかわらずボランティア活動に興味があった」であった。開始当初は児童館で企画されたイベントへの参加や小中学生を対象とした学修支援が中心で，9 月以降は学生が主体となり季節のイベントなどを企画運営した。活動の振り返りアンケートの回答者 39 名のうち 1 回以上参加者は 29 名で, そのうち約 9 割の学生が「子どもとの関わり方が上手になった」「地域で子育てを支援する仕組みがあることが分かった」と感じていた。三原市子育て支援課及び児童館職員は学生が児童館に対して「とても貢献した」と感じていた。今後は学生・地域，両者の視点から継続的な活動成果を評価する必要がある。

キーワード：保健福祉学部学生，ボランティア活動，児童館

1　はじめに

現在の少子高齢化を背景として文部科学省は，地域の課題解決や地域が必要とする人材の育成等に積極的に貢献しようとする大学に対する支援の強化を図っている[1)]。保健福祉系学部の大学生を対象とした調査では，学生が地域貢献活動によって世間への見方の広がりや知識・技能の習得を感じていること[2, 3)]，地域で活動することで地域課題への気づきや地域における人とのつながりの大切さへの気づきなどが得られていること[4)]が報告されている。これらのことから地域活動は，地域の課題解決や活性化を担う人材の育成につながる活動となり得るといえ，大学において促進すべき活動であるといえる。

保健福祉系学部の大学生の地域活動としては，単一学科学生による地域の健康支援活動[5)]，地域サロンへの参加[6, 7)]などが報告されており，いずれも対象への理解の深まりや地域活動への理解の深まりなどの成果が得られている。加えて複数学科・コース協働での地域活動の成果としては，他職種への理解の深まりが得られることも報告されている[8)]。現在の保健福祉分野においては多職種連携・協働が重視されており，複数の学科・コース協働の地域活動の事例を蓄積し効果や課題を明らかにする必要があると考える。

県立広島大学保健福祉学部は，看護学，理学療法学，作業療法学，コミュニケーション障害学，人間福祉学の 5 コースを擁する学部である。本学部では，令和 4 年度より有志の学生を募り，大学の所在する広島県三原市の児童館「ラフラフ」（以下，ラフラフ）でのボランティア活動を行なっている。ラフラフは，児童館を利用する小中高生や保護者がボランティアスタッフとして運営に携わり，効果的に施策に位置付けられている児童館として評価されている[9)]。児童館は，子どもや保護者との交流に加え，活動を通した地域住民との交流の場でもあり，大学生にとって異世代との交流が期待できる場であるといえる。そこで，保健福祉学部の学生によるボランティア活動の促進に向けた課題を検討することを目的として，学生による児童館での活動内容と成果について報告する。

倫理的配慮としては，学生には活動を報告するにあたり，個人が特定されないよう集計した上で情報を活用すること，活用への不同意を申し出た場合にも成績評価には影響せず不利益は被らないことを周知した。ラフラフに対しては，活動報告において個人が特定されないように配慮する旨を伝え承諾を得た。

2　活動の報告

2.1.1　活動の準備

学生の活動の実施にむけて，はじめに学部の各コース教員 1 ～ 2 名ずつからなる教員チームを構成した。令和 4 年 4 月～ 6 月に，三原市子育て支援課，ラフラフとの連携を図り，学生の活動方法や注意事項を共有した後，6 月末からボランティアスタッフとしての活動を希望する学生を募った。学生と教員，および学生間の情報共有は，大学内のオンラインコミュニケーションツールである Microsoft Teams（以下，Teams）を用いた。学生ボランティアの導入にあたっては，すでに授業の一環でラフラフとの関わりをもっていた学生グループから意見をもらいながら，学生が主体となって参加できる方法を検討した。学生への活動の周知は，各コースの教員から行なうと同時に，教学課の協力を得ながら学内に活動への参加を促すポスターを掲示した。参加希望の学生とラフラフをつないだオンラインでの施設案内，活動紹介の場を持った。

なお，活動の開始時に目的として次の 4 点を設定した。

①地域のニーズに応じた市町の取り組みについて理解が深まる
②異世代との交流経験を通して，コミュニケーション能力が高まる
③異世代の運営スタッフと共に活動する経験を通して，他者と協働する力が養われる
④地域課題に気づく力や，解決に向けて主体的に行動する力が養われる

2.1.2　参加学生の概要

令和 4 年 6 月末～ 5 年 3 月末にラフラフでのボランティア活動を希望し，スタッフとして参加登録した学生は 73 名であった。ボランティアスタッフ登録時に，基本属性，ボランティア活動への参加動機や地域活動への希望を尋ねた（表 1）。学年は，2 年生が最も多く 39 名（53.4％）であった。加入時期は，募集を始めた 7 月が最も多かったが，その後も継続的に参加があった。参加動機は「子どもへの支援に興味があった」が最も多く（75.3％），次に「分野にかかわらずボランティア活動に興味があった」（72.6％）であった。ボランティア活動を通して，他コース学生と交流できることへの期待も参加動機となっていた。

2.1.3　活動の実施状況

令和 4 年 8 月の学生の夏季休業開始後，活動を開始した。活動を始めるにあたり，ラフラフの雰囲気を知ることや，活動の目的の共有や参加学生同士の意見交換を行なうために，学生と三原市子育て支援課，児童館職員，教員がラフラフに集い，キックオフミーティングを開催した。ラフラフの概要等についての説明を受けた後，授業で関わりのあった学生グループが進行役となりボランティアスタッフの愛称を選定する投票を行ない，「ユニスタッフ」という愛称で活動することとなった（図 1）。

表 1．参加学生の属性（n=73）

項目	n	%
学年		
1 年生	31	42.5%
2 年生	39	53.4%
3 年生	3	4.1%
所属		
看護	26	35.6%
作業療法	14	19.2%
理学療法	3	4.1%
コミュニケーション障害	18	24.7%
人間福祉	12	16.4%
加入時期		
6 月	3	4.1%
7 月	43	58.9%
8 月	12	16.4%
9 月	5	6.8%
10 月	5	6.8%
11 月	2	2.7%
1 月	1	1.4%
3 月	2	2.7%
参加動機（複数回答）		
子どもへの支援に興味があったから	55	75.3%
分野にかかわらずボランティア活動に興味があったから	53	72.6%
児童館のイベントに参加できることが楽しそうだったから	35	47.9%
ボランティア活動を通して他コース学生と交流したいと思ったから	19	26.0%
その他（授業でボランティアを行う必要がある，友達に誘われた，など）	3	4.1%

図 1．キックオフミーティング（8 月 8 日）

図 3．大学生が企画運営したクリスマスイベント（12 月 11 日）

学習支援

絵本の読み聞かせ

図 2．ラフラフでの活動の様子

活動開始当初は，主にラフラフで企画された活動の運営スタッフとしての参加や，小中学生を対象とした学習支援が中心であった(図2)。令和4年度後期開始(9月）以降は，学生が企画・運営する活動が実施された。学生が主体となって計画した活動を表2に，活動の様子を図3に示す。

3　活動の成果

3.1　学生が感じた成果

令和5年3月末時点で，ラフラフのボランティアスタッフとして登録している73名の学生に対して活動の振り返りアンケートを行ない，39名の回答を得た(回収率53.4％)。回答はMicrosoft Formsを使用したアンケートをTeams上に送信し収集した。

参加回数は,「5回以上」「2～4回」「1回のみ」「まだ参加していない」から該当する回数を選択するように依頼した。「5回以上」が4名,「2～4回」が12名,「1回のみ」が13名,「まだ参加していない」が10名であった。

活動の振り返りとしては，子どもとの関わり方の変化など5項目について「強くそう思う」～「まったくそう思わない」の4件法で尋ねた。ラフラフでの活動に1回以上参加している学生29名の，活動の振り返りを表3に示す。「子どもとの関わり方が上手になった」については，「強くそう思う」「そう思う」と回答した学生は29名中26名（89.6％）であった。「地域で子育てを支援する仕組みがあることが分かった」については,28名（96.6％）の学生が「強くそう思う」「そう思う」と回答していた。「主体的に活動することができた」「ラフラフに貢献できた」「他学生と協力しながら活動に取り組むことができた」についても，8割以上の学生ができたと感じていた。

「活動に対する意見や感想」,「自分たちができると考えること」については自由記載で尋ね，活動への参加経験のない学生も含めて分析した。内容の類似性で分類した結果を表4に示す。以下，分類名を＜　＞で示す。

活動に対する意見や感想としては，最も多かったのは＜子どもや保護者と接する貴重な経験になった＞であった。他にも，地域で子育てを支援する場があることへの理解の深まりも得られていた。

自分たちができると考えることについては，＜安心して遊ぶことのできる場の提供＞＜交流の場づくり＞など，様々な意見があった。少数ではあるが，ラフラフでの活動を通して＜街の活性化＞を図るという意見

表2．ユニスタッフが運営に関わったイベント

日付	イベント名	ボランティア学生数	参加者数	内容
10月28日	ユニスタッフ＆高校生の交流会	大学生11名	高校生29名	ラフラフを利用している市内外4つの学校に通う高校生29名と交流
12月10日	ラフラフクリスマス会	大学生7名 高校生2名	乳幼児19名 保護者19名	高校生スタッフとの合同企画 クリスマスリースづくり,読み語り,ハンドベル演奏，ゲーム
12月11日	ラフラフクリスマス会	大学生6名 高校生3名	小学生9人	
12月22日	ユニスタッフのメリークリスマス	大学生3名	来館者26人	来館者を対象に読み語り，ギター弾き歌い
3月26日	ラフラフフラッシュ	大学生5名（写真サークル学生4名）	来館者145名	Flash写真サークルが児童館に来館した子どもたちを撮影

表3.活動の振り返りアンケート結果（n＝29）

	子どもとの関わり方が上手になった	地域で子育てを支援する仕組みがあることが分かった	主体的に活動することができた	ラフラフに貢献できた	他学生と協力しながら活動に取り組むことができた
強くそう思う	1（3.4）	10（34.5）	3（10.3）	3（10.3）	6（20.7）
そう思う	25（86.2）	18（62.1）	23（79.3）	21（72.4）	18（62.1）
そう思わない	2（6.9）	0（0）	3（10.3）	4（13.8）	5（17.2）
全くそう思わない	1（3.4）	1（3.4）	0（0）	1（3.4）	0（0）

注　カッコ内は%を示す

表４．ラフラフへの活動に対する意見や感想・自分たちにできる活動

項目	分類名（記述人数）	記述（一部抜粋）
活動に対する意見や感想	子どもや保護者と接する貴重な経験になった（８）	地域の子どもたちや，保護者と接する機会を設けてもらえてよかった。学校に通っているだけでは経験できないことなので貴重な経験になった。
	コミュニティの場への理解が深まった（２）	ラフラフでの活動を通して地域のコミュニティが形成されている場を実際に見ることができた。
自分たちができると考えること	安心して遊ぶことのできる場の提供（４）	子どもの見守りと遊び相手やイベントの企画。兄弟姉妹と2名以上お子さんがいらっしゃる保護者は，全員に目が行き届かなくて大変。そんな時，もう１人子どもを見守ることで楽になるのではと思う。
	相談できる場の提供（３）	話をしたり，相談の場を提供したり，遊びの場を提供したり，情報を共有したりができると思う。
	交流の場づくり（３）	子どもたちが，保護者だけでなく色んな人たちと交流する手伝いをすることができると思う。 サークルとのコラボや，大学生の趣味を生かした活動がよりできたら素敵。子供たちがいろいろな人や物事に触れるきっかけになれると思う。
	子どもの学習支援（２）	学習のサポートや小さな子どもの見守りなど。
	子どもの居場所づくり（１）	家，学校以外の憩いの場を作ること。安らぎの場。
	街の活性化（３）	街を元気にする。 コミュニティの場を盛り上げることができる。
	専門的知識の提供（１）	専門的な知識を活かした活動ができるのではないかなと思う。

もあった。

3.2　職員が感じた成果

学生の活動についての地域からの評価を知るために，三原市子育て支援課，児童館職員にも活動の振り返りアンケートへの回答を依頼した。学生のラフラフへの貢献度は「とても貢献した」～「全く貢献しなかった」の５件法で尋ね，活動への感想，今後に期待することを自由記載で尋ねた。以下，自由記載の具体的な記述を“　”で示す。

回答者は５名であり，ラフラフへの貢献度は５名全員が「とても貢献した」と回答した。とても貢献したと感じた理由としては，“0 歳～小中高，大学生，保護者，地域の人といった全世代が集う場所になった”“大学生が来ることを楽しみにしている子どもたちが沢山いて，児童館が盛り上がった”などであった。今後期待することとしては，“大学生個々の強みを活かして得意なこと，挑戦したいことを児童館でイベントとして実施して頂ければ嬉しい”“ラフラフでの活動を中心にしながら，地域の子育てに貢献してもらえたら嬉しい”などがあった。

4　考察

4.1　保健福祉学部学生の主体的な地域活動の促進について

学生の活動の動機としては「子どもへの支援に興味があったから」が 75.3％と最も多く，「児童館のイベントに参加できることが楽しそうだった」も 47.9％と多かった。本活動は児童館におけるボランティアスタッフを募集したことから，子どもへの支援に対する興味が動機づけとなり，参加登録していたと推察される。加えて，「分野にかかわらずボランティア活動に興味があったから」も 72.6％と多かった。保健福祉系学部の大学生 144 名を対象とした城川らの研究[2)]においても，ボランティア活動に対して「関心あり」との回答は全体の 72% であったことが報告されており，保健福祉系学部の大学生のボランティア活動への興味は高いといえる。また，平成 17 年度の日本学生支援機構による大学生のボランティア活動に対する意識調

査[10] では，約 8 割の学生がボランティア活動は「進路への影響はある」と回答しており，保健福祉系学部の学生では対人援助に関する活動が動機づけられやすい活動になるといえる。

活動を通した他コース学生との交流も，参加動機としてあがっていた。城川らは，地域貢献活動を通して「友人を得ることができた」と回答した大学生の割合は，過去に活動に参加した（現在はしていない）群で 27% であったのに対して，現在参加群で 55% であったことを報告している[2]。この結果から，活動を通して学生同士の関係性が構築された学生は，ボランティア活動を継続していることが推察される。本活動のように複数コースによる地域活動を行なう場合は，活動の場以外で交流を持つ機会が少ないと考えられる。今回の活動開始時に実施したキックオフミーティングのように，参加登録学生が活動の目的や内容を共有するとともに，意見交換等を通して交流を深めることのできる機会を意図的に設けることが，活動の継続には効果的であると考える。

4.2　児童館での活動の成果について

活動を通して学生は, 子どもとの関り方を学んだり，地域における子育て支援の仕組みの理解を深めていた。先行研究では，地域の子育て支援の場に学生が関わることの学びとしては，『子どもとのかかわりについての学び』『保護者とのかかわりについての学び』『子ども理解の深まり』『子育て支援グループ活動の意義の理解の深まり』などが得られたとの報告がある[11]。本活動においても同様の学びを得ることができていることから，児童館における活動は保健福祉職としての知識や技能の深化に繋がる活動となるといえる。加えて参加学生の 82.7％が「ラフラフに貢献できた」と感じており, さらには今後の活動として“子どもたちが，保護者だけでなく色んな人たちと交流する手伝いをすることができると思う。”“専門的な知識を活かした活動ができるのではないかなと思う。”など，自らを子育て支援の人的資源として捉えていることが伺える記述が見られた。学生たちが地域活動で得た知識や技能，課題解決に向けて行動する力をより発展させることができるよう，周囲が支援していくことが望まれる。

本活動による学生の意見や感想からは，主に活動の対象となる子どもや保護者，地域での子育て支援活動に対する理解の深まりは伺えたが，他の職種に対する理解の深まりが伺える記述はなかった。「他の学生と協力しながら活動に取り組むことができた」と感じている学生は 8 割以上であったが，同コースの友人同士での参加が主であったことが伺える。今後は複数コースの学生が協働して活動することができるよう，運営方法を検討していく必要がある。

4.3　活動の課題と今後の展望

課題としては学生の活動への積極的，継続的な参加を進めていくということである。アンケートに回答した 39 名のうち，半数強の 23 名の参加回数が「1 回のみ」，あるいは「まだ参加していない」であった。今回の振り返りアンケートでは参加できていない理由は尋ねていないが，先行研究では地域貢献活動に参加した学生が継続を辞めた理由としては「学習時間等との調整がつかなくなった」「アルバイトの時間が欲しかった」[2], ボランティア活動開始時の障害要因として「大学の時間が忙しい」「アルバイトが忙しい」という理由が上位を占めている[10] ことから，大学での学修やアルバイトなどの活動との両立が図れないことが，積極的な参加に繋がらない要因となるといえる。一方で活動の継続要因としては，城川らは地域活動を継続している学生の参加のきっかけが「社会のために何か役に立ちたかった」「人から勧められた」「自分の技術等を活かしたかった」の順に多かった[2] ことを報告している。Deci らは，人が内発的に動機づけられて行動するためには，「自律性」「有能感」「関係性」が重要であると指摘している[12]。本活動では学生の，子どもの支援やボランティア活動に対する興味や関心から活動が始まること，かつ地域貢献できているという実感を得られること，活動を通した人間関係の広がりが得られることが，活動の継続や発展において重要であるといえる。参加学生の成果だけでなく学生が地域活動に参加することによる地域への波及効果についても明らかにすることや，活動を通して他者との交流が広がっていくことが，学生の活動への積極的，継続的な参加に繋がると考える。

現在の少子高齢社会において，大学生の地域活動を通した街の活性化へのニーズも大きい。学生，地域，大学の 3 者が連携協働し，より望ましい地域活動の在り方を検討していく必要がある。

5　結論

県立広島大学保健福祉学部学生が, 三原市児童館「ラフラフ」でのボランティア活動を実施したので取り組みと成果を報告した。

令和 4 年 6 月末から活動への参加を希望する学生を募り，令和 5 年 3 月末までに 73 名が登録した。活動への参加登録の動機は「子どもへの支援に興味があった」が最も多く，次に「分野にかかわらずボランティア活動に興味があった」であった。活動開始当初は児童館で企画されたイベントへの参加や小中学生を対象とした学修支援が中心で，9 月以降は学生が主体となり季節のイベントなどを企画運営した。

活動の成果としては，ラフラフでの活動に 1 回以上参加した 29 名の学生のうち約 9 割が「子どもとの関

わり方が上手になった」「地域で子育てを支援する仕組みがあることが分かった」と感じていた。今後，自分たちができると考えることとしては＜安心して遊ぶことのできる場の提供＞＜交流の場づくり＞などの意見があった。地域の評価として，三原市子育て支援課及び児童館職員は，学生がラフラフに対して「とても貢献した」と感じていた。

今後は，学生・地域，両者の視点から継続的な活動成果を評価する必要がある。

6　利益相反

本報告に関して，開示すべき利益相反はない。

謝辞

本活動にご理解くださり，ご協力いただいた三原市子育て支援課ならびに児童館「ラフラフ」の関係者の皆様に，深く感謝いたします。

7　文献

1)　文部科学省：平成 28 年文部科学白書　第 5 章　高等教育の充実．文部科学省，（オンライン），入手先＜https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/ b_menu/hakusho/html/hpab201701/detail/1398214.htm ＞，（参照 2023-8-15）
2)　城川 美佳，大島 憲子ほか：保健・医療・福祉分野の大学生における地域貢献活動への参加状況と同活動参加への支援ニーズ，神奈川県立保健福祉大学誌，17（1）：129-138，2020
3)　棚田 裕二 , 岡本 直行ほか：新見公立大学学生における地域貢献活動に関する調査．新見公立大学紀要，40：219-222，2019
4)　仁平利沙，渡辺陽子ほか：看護学生と高齢者との世代間交流の効果と活動内容についての文献研究．人間と科学　県立広島大学保健福祉学部誌，22（1）：53-64，2022
5)　安仁屋 優子，永田 美和子ほか：ゆんたくしながら健康づくり in 名護市場の実践報告．名桜大学紀要，22：101-105，2017
6)　太田 茂美：地域サロン活動を通した学生の学修効果について．長崎短期大学研究紀要，33：95-106，2021
7)　古澤 麻衣，大浦 智子ほか：学生が地域で運営する健康サロンにおける学習と気づき．作業療法，34（3）：325-334，2015
8)　渡邉 亜紀子，藤井 博之ほか：協働学習による『学生主体活動型地域サロン』実施後の学生が語った学びと課題．保健医療福祉連携，12（1）：2-8，2019
9)　厚生労働省：2021 全国児童館実態調査報告書．（オンライン），入手先＜ https://www.mhlw.go.jp/content/11920000/000980971.pdf ＞，（参照 2023-8-15）
10)　日本学生支援機能：学生ボランティア活動に関する調査報告書．日本学生機構，（オンライン），入手先＜ https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/__icsFiles/afieldfile/2021/03/12/ houkoku_02.pdf ＞，（参照 2023-8-15）
11)　菊島 勝也，福永 瑞樹：子育て支援グループ活動を通じた学生スタッフのネガティブな体験と体験的学び：乳幼児とその保護者との関わりを通して．母性衛生，60（2）：378-385，2019
12)　Edward L. Deci, Richard Flaste：Why We Do What We Do － Understanding Self-Motivation；桜井 茂男，人を伸ばす力―内発と自律のすすめ．東京，新曜社，1999

Report on volunteer work at a children's house by students belonging to the Faculty of Health and Welfare

Yoko WATANABE[*1]　Masayuki TAKAGI[*2]　Aki TAGUCHI[*3]
Noriko YOSHIDA[*4]　Satomi AOI[*1]　Yasushi ORITA[*2]　Tadayuki IIDA[*5]

*1 Nursing Course, Department of Health and Welfare, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima
*2 Occupational Therapy Course, Department of Health and Welfare, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima
*3 Communication Science and Disorders Course, Department of Health and Welfare, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima
*4 Human Welfare Course, Department of Health and Welfare, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima
*5 Physical Therapy Course, Department of Health and Welfare, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

Received 15 November, 2023
Accepted 26 December, 2023

Abstract

Students belonging to the Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima, did volunteer work at the children's house "rafu-rafu" in Mihara City. We report their attempts and outcome. Students wishing to do volunteer work were recruited from June 2022. The number of students registered before March 2023 was 73. The most frequent motive was "interests in support for children", followed by "interests in volunteer work regardless of field". After the start of volunteer work, initially, it primarily consisted of participation in events planned by the children's house and study support for elementary/junior high school students. After September, the students mainly planned/managed seasonal events. Of the 39 respondents to a questionnaire on a review of activities, 29 reported ≥1 session of activity participation. Approximately 90% felt that they had become good with children, and found out that there was a regional system for supporting child rearing. The staff belonging to the child rearing support section of Mihara City or children's house felt that the students had contributed to "rafu-rafu". In the future, the results of continuous activities should be evaluated from students'/regional and both perspectives.

Key words: Students belonging to the Faculty of Health and Welfare, volunteer work, children's house